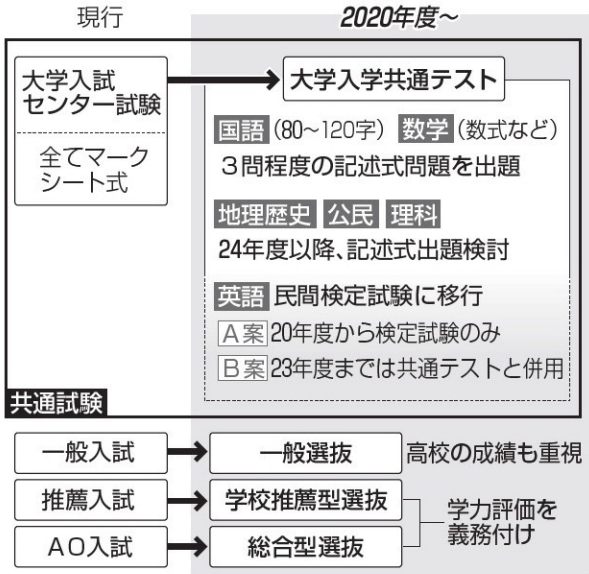


英語、民間試験移行2案

大学入試「20年度から」「23年度まで共通テストと併用」

文部科学省の大学入試改革案 (新名称はいずれも仮称)



文部科学省は16日、大学入試改革の検討状況を公表した。現在の中学3年生が高校3年生になる2020年度に、大学入試センター試験を「大学入学共通テスト(仮称)」に改め、英語は20年度から民間検定試験に全面移行するA案と、23年度まで共通テストと検定試験の双方またはどちらかを受け、24年度から全面移行するB案を示した。共通テストはマークシート式を続けるが、国語で80～120字、数学で数式などを書かせる記述式問題も出す。

共通1次試験からセンター試験になった1989年度以来の大幅な変革で、文科省は意見公募などを経て、英語の2案を一つに絞り、6月中旬に共通テストの実施方針を作成する。19年度までにプレテストを3回

行い、成績提供方法などを含む実施大綱をまとめる。

国公立大の推薦入試を学校推薦型選抜、書類や面接などによるアドミッション・オフィス(AO)入試を総合型選抜と名称を改め、20年度から共通テスト

などで学力も評価することを義務付ける案も示した。

一般入試も一般選抜とし、高校の成績も重視する。

共通テストは、センター試験と同じ1月中旬の2日間に実施する。英語は、英検やTOEICなどから水準を満たしたものを文科省が「認定試験」に選ぶ方針で、センター試験にはない

受験機会の格差懸念

関係者 県内

文部科学省が16日、2020年度に大学入試センター試験から変える予定の「大学入学共通テスト(仮称)」の問題例を公表したことを受けて、県内の教育関係者からは冷静に経過を見守る声が聞かれた一方、英語については地域間の格差が助長されることへの懸念の声も上がった。

学習塾「志門塾」高校部大垣校の廣瀬公智校長は「『書く・話す』力への対策は重要だが、文法の勉強がおろそかにならないよう生徒に伝えたい」と冷静に受け止めた。国語と数学の問題例については「思考力、

「書く・話す」力の評価が可能となる。ただ、学習指導要領で定める学習内容と検定試験の評価の観点とは異なるため、文科省は双方の対応関係を確認するとしている。また、検定試験によって受験料や試験会場数に大きな開きがあり、経済状

況や居住地で受験機会の公平性が損なわれないかも課題だ。松野博一文科相は会見で、実施団体に受験料値下げや全都道府県での実施を要望する考えを示した。記述式問題は「国語」「数学I」「数学I・A」で各

3問程度出す。マークシート式と同じ時間内に解かせ、国語は現行の80分から100分に、数学は60分から70分に延ばす。出題と採点はセンターが担うが、採点はノウハウを持つ民間業者に委託する予定。